

## 八条の式部卿について

藤河家 利 昭

はじめに

『源氏物語』の梅枝の巻の薰物合わせにおいて、紫の上が伝えた方は八条の式部卿に由来するものであった。この仁明天皇皇子八条の式部卿本康親王は薰物調合の名人であると言われる。親王については『河海抄』や池田亀鑑編『源氏物語事典』等で触れられ、また『大日本史料』には親王に関する史料がまとめられているが、ここでは本康親王についてさらにその周辺や事績等を明らかにし、物語に取り込まれた事情、紫の上が伝えた理由などについても考えてみたい。

### 一、八条の式部卿の御方

正月下旬に、明石の姫君の入内準備のために、薰物を競って調査している源氏と紫の上の様子が次のように描かれて

いる。

大臣は、寝殿に離れおはしまして、承和の御いましめの二つの方を、いかでか御耳には伝へたまひけん、心にしめて合はせたまふ。上は、東の中の放出に、御しつらひことに深うしなさせたまひて、八条の式部卿の御方を伝へて、かたみにいどみ合はさせたまふほど、いみじう秘したまへば、「匂ひの深さ浅さも、勝負の定めあるべし」と、大臣のたまふ。(二・三九七)

源氏が仁明天皇禁制の二つの方を伝えているのに対して、紫の上はその仁明天皇皇子本康親王の方を伝えている。源氏の二つの方と紫の上の方、そしてその源について『花鳥余情』は次のように説いている。

源氏の君のあはせ給ふほうと紫のうへのほうとともに侍従黒方なりいづれも承和の御いましめの方なればかはるへきやうあるへからすた、しみなもとはおなし説

なれとものちにちとつ、その人の意巧によりて加減する事あるによりて次第にかはる事のある物なり八条式部卿は紫上の父式部卿宮になすらへていへり又兩種方は不伝男と承和の御門の御いましめの方にのせられたは紫上のを正説にすへきなりこれによりて源氏の君のあはせ給ふをはうたかひをのこしていかで御み、につたへ給ふとはのせたり

(二二四)<sup>注3</sup>

源氏と紫の上の方は、両者ともに侍従と黒方である。また侍従と黒方のいずれも仁明天皇禁制の方であるから源は同じであるが、後に少しずつ変わるものである。さらに侍従と黒方は男には伝えないとされているので、仁明天皇禁制の方は女である紫の上が正統を伝えたことになるのである。現代の注もこれに従っているものが多い。なお本康親王を紫の上の父式部卿の宮に准えたと見ている。さらにこの仁明天皇の方と本康親王の方との関係について『源氏物語評釈』で次のように言われている。

仁明天皇の皇子、本康親王。薫物の名手といわれた人。

仁明天皇は香で有名な方であり、その調合法がお子様の中で本康親王に受け継がれた。

(六卷三一)<sup>注4</sup>

仁明天皇から本康親王へ親子直伝のものであり、しかも男には伝えないものであるとすれば、紫の上は愈々、『花鳥

余情』の説のように、源氏と同じ薫物を調合しながら、源氏よりも仁明天皇に始まる侍従と黒方の正統を受け継いでいることになろう。

この源氏と紫の上の薫物は、源氏の依頼によつて朝顔の前斎院や六条院の御方々から寄せられた薫物とともに、二月十日に、源氏の弟兵部卿の宮が判者になつて判定される。源氏の薫物では黒方、侍従の中、侍従が、紫の上の方は黒方、侍従、梅花の中、梅花が特に取り上げられる。これも本康親王の方を伝えているのであろう。しかし、仁明天皇禁制の方ではないことになろう。紫の上の梅花は次のように評価されている。

対の上の御は、三種ある中に、梅花はなやかに今めかしう、すこしはやき心しらひをそへて、めづらしき香加はれり。「このごろの風にたぐへんには、さらにこれにまさる匂ひあらじ」とめでたまふ。(二・四〇二)

『河海抄』は「心しらひをそへてかほりくは、れりとは寛教僧都説云春は丁子加増あるへしとみえたれはかやうの香をのこされたるか」(四四二・三)<sup>注5</sup>としている。はなやかに当世風であり、少し鋭い心遣いを添えて珍重すべき香が加わっているという梅花の香は、紫の上自身の人柄や才覚を偲ばせるものになっている。また香自体も今の時期にふさ

わしいものである。紫の上の梅花は、朝顔の斎院の黒方、夏の御方（花散里）の荷葉、冬の御方（明石の君）の百歩の方の中で、特に明石の君が調合した、薫衣香の優れた調合法であり、宇多天皇の方を引き継いだ公忠朝臣が特に選んで作った百歩の方と対をなしている。紫の上が八条の式部卿の方を伝えたのは、源氏の仁明天皇禁制の方と密接な関係があることと相俟って、紫の上の六条院における地位を引き上げ、確定するものであろう。<sup>注6</sup>

## 一一、八条の式部卿の周辺

『河海抄』梅枝の巻では「八条の式部卿の御ほうをつたへて」に次のように注している。

本康親王 一品式部卿 号八条宮 仁明天皇第七御子  
母從四位下紀種子名虎女延喜元年薨高名薫物合也

黒方

沈四両 丁子二両 甲一両 薫二両 鬱金二両

又侍從

沈四両 丁子二両 甲一両 麝二両 薫陸二分 甘松

二分 件二方故八条宮方云々 (四四一)

本康親王は一品式部卿であり、八条宮と号されたので「八

条の式部卿」と呼ばれている。そして延喜元年（九〇一）に薨去した薫物調合の名人である。黒方と侍從の二つの方は親王の方であるとしている。親王が仁明天皇の第七皇子であり、母が紀種子であることは『紫明抄』梅枝の巻（一〇六）<sup>注7</sup>に拠ったためであろう。『花鳥余情』梅枝の巻では、先の引用に続く部分に、「八条式部卿本康親王は仁明天皇の第五子母は從四位上滋野温子參議貞主女也」（三三七）とするが、母の名に誤写等があるかも知れない。

『源氏物語事典』上巻では次のように言っている。

母は『本朝皇胤紹運録』に「母貞主女、從四位上滋野繩子」とあり、その位置は第五皇子とおぼしい。<sup>注8</sup>

親王は仁明天皇の第五皇子であり、母は貞主女、從四位上滋野繩子と考えられている。

本康親王は延喜元年（九〇一）十二月十四日に薨じている（『日本紀略』等）<sup>注9</sup>が、その生年は記されていない。ただ『古今集』巻第七、賀歌（三五二番）には親王の七十の賀を祝う紀貫之の歌がある。

本康親王の七十の賀のうしろの屏風によみてかきける

紀貫之

春くれば宿にまづ咲く梅の花君が千年のかざしとぞ見る

続いて次の素性法師の二つの歌（三五三、三五四番）も題詞がないが、同じ時の歌として挙げておく。

素性法師

古にありきあらずは知らねども千年のためし君にはじめむ

臥して思ひ起きてかぞふる万代は神ぞしるらむわが君のため （二七一）<sup>注10</sup>

この二つの歌は『素性集』にあるが、二首とも本康親王の七十賀の屏風歌とするものと、三五三番歌を本康親王の五十賀の後の屏風歌とし、<sup>注11</sup>三五四番歌を宇多法皇の寺巡りのお供で詠んだ歌とするものがある。この七十の賀がいつ行われたかについて学術文庫では次のように推定している。

本康親王の生年が不明であるが、光孝天皇および人康親王の弟であり、光孝天皇と同年とすれば昌泰二年（八九九）となり、二年後れるとすれば延喜元年（九〇一）となり、その年十二月に没せられているので、延喜元年（昌泰四年）またはその前年あたりであろう。<sup>注12</sup>

（一八五）

この説に従って延喜元年（九〇一）または昌泰三年（九〇〇）に行われたとすると、その生年は淳和天皇の天長八年（八三一）または同七年（八三〇）の春ということになる。

時代は淳和、仁明、文徳、清和、陽成、光孝、宇多、醍醐天皇の世に亘っている。なおこの七十の賀は親王の八条の宮で行われ、貫之は招かれて屏風歌を詠進したのである。貫之は能書家で、自分で書いたとする説もある。<sup>注13</sup>親王は貫之と交渉があったと考えられる。

『本朝皇胤紹運録』<sup>注14</sup>は仁明天皇の八人の皇子を挙げている。

文徳天皇 諱道康。治八年 母太皇太后藤順子。冬嗣

公女

宗康親王 四品中務卿 母贈皇太后藤澤子。贈太政大

臣總繼女

光孝天皇 諱時康。治三年。母贈皇太后藤原澤子。贈太

政大臣紀伊守從五位下總繼女

人康親王 四品。彈正尹。法名法性。又号山科宮。又

北野親王。母同

本康親王 一品式部卿。号八条宮。母貞主女。從四上

滋野繩子

国康親王 四品。上野大守。昌泰元三十五薨 母藤原

賀登女。幅田丸女

常康親王 无品。仁壽元出家。号雲林院宮。母紀種子。

右兵衛督從四上紀名虎女

成康親王 无品 母女御藤貞子

『二代要記』<sup>注15</sup>は本康親王について「四品式部卿母從四位上滋野綱子參議貞主女也」とするが、後に見るように「一品式部卿」が正しい。また母も「滋野繩子」が正しい。また『要記』は太子として「道康」、皇子として「宗（定イ）康親王 人康親王 本康親王 国康親王 常康親王 成康親王」としているが、後宮のところには「女御藤澤子 小松母藤縄継女（總繼女が正しい）」とされていて、小松帝すなわち光孝天皇（時康親王）を挙げているので、宗康親王の次に時康親王が挙げられるべきであろう。両者を合わせて考えると、本康親王は親王の中では第五番目ということになる。なお『皇代記』<sup>注16</sup>も皇子として八人を挙げ、本康親王は五番目である。本康親王について『要記』と同じく「母滋野綱子參議貞主女」とする。親王の中には本康親王と同母はいることが分かる。『尊卑分脈』<sup>注17</sup>も文徳天皇、光孝天皇を含めて八人の親王の中、五番目に本康親王を挙げている。なお母については「母女御統子參議（滋野）貞主女」とするが、「統」の字は「故本及文實作繩、編年記要記作綱」としている。

親王の中で、宗康親王は嘉祥三年（八五〇）三月十九日に仁明天皇の入道に伴って天皇の御子、源多とともに入道し（『日本紀略』）、常康親王は天皇崩御の翌年の仁壽元年

二月二十三日に僧になっている（同）。また成康親王は仁壽三年（八五三）四月十八日に薨じている（同）。さらに国康親王は齊衡三年（八五六）四月二十六日に僧となり（同）、人康親王は貞觀元年（八五九）五月七日に出家している（『紀略』、『三代実録』<sup>注18</sup>）。このように文徳天皇（道康親王）、光孝天皇（時康親王）を置いて、五人の親王が出家したり、薨じている中で、本康親王は一品式部卿にまでなった。光孝天皇となった時康親王が元慶六年（八八二）正月七日に一品式部卿になっている（『三代実録』）。本康親王は時康親王に次ぐ地位にあった。

なお『紹運録』は親王の次に、時子内親王、新子内親王、柔子内親王、真子内親王、親子内親王、平子内親王、重子内親王、久子内親王、高子内親王の内親王九人、源多、源冷、源光、源効、源寛、貞登、忠子の源氏五人、貞氏一人、それに統氏の女子一人（忠子。ただしこれは淳和帝の皇女かとする）を挙げている。『二代要記』も皇女として九人の内親王を挙げているが、時子内親王の前に新子内親王を置き、真子内親王は「貞（真イ）子内親王」とする。次に斎宮として久子内親王（仁明帝第七皇女）、斎院として亮子内親王（同第八皇女）を挙げている（これは高子内親王の誤りであろう）。また源や貞の姓を賜った男子は同じで

ある。『皇代記』は柔子内親王を挙げていない。また久子内親王を第八皇女、高子内親王を第九皇女とする。覚が効の前に挙げられている。

内親王の中で時子内親王と柔子内親王については次のような記事がある。

時子内親王 齋院 母同本康〔頭〕続後記。承

和十四年二月戊寅。先品時子内親王薨

柔子内親王 母同成康〔頭〕三代実録。貞觀十一

年二月廿八日。无品柔子内親王薨。母

三木正四位下滋野朝臣貞主之女。從四

位上繩子也

齋院を勤めた時子内親王は本康親王と同母である。また

柔子内親王については成康親王に同じとするが、『三代実録』（『紀略』も同じ）を引くように、母が滋野繩子とあるので、これも同母と考えられる。『要記』は二人とも同母とする。なお『皇代記』は皇女のところ「時子内親王

母同本康賀茂齋院」とするのみで柔子内親王は挙げていない。この二人が親王と同母であることは、後述するように

『文徳実録』<sup>注19</sup>仁壽二年（八五二）二月八日の滋野貞主の卒

伝の中で、長女繩子が仁明天皇の寵愛を受け、本康親王、

時子内親王、柔子内親王を生んだことから裏付け

られる。

繩子の父滋野貞主についても上記卒伝から、その家及び人物について見ておきたい。

参議正四位下行宮内卿兼相模守滋野朝臣貞主。貞主

者。右京人也。曾祖父大学頭兼博士正五位下檜原東人

該通九經。号为名儒。（略）父尾張守從五位上家譚。

延暦年中賜姓滋野宿祢。貞主身長六尺二寸。雅有

度量。涯岸甚高。

曾祖父東人が儒者であつたように、大同二年（八〇七）貞

主も文章生試に及第し、弘仁二年（八一）少内記、同六

年（八一五）に大内記になっている。同十四年（八二三）

仁明天皇が東宮に立つた日に東宮学士となっている。仁明

天皇との関わりはこの時に生じ、やがて天皇に長女を入内

させることにもなったのであろう。天長八年（八三一）には、諸儒とともに古今の文書を撰集して分類し、凡そ一千

卷の『秘府略』を作っている。天皇即位の初めには国司を

兼任しながら内蔵頭、承和七年（八四〇）大藏卿になり、

同九年（八四二）秋には参議になっている。同十一年（八

四四）には城南の宅を伽藍とし、慈恩寺となしている。<sup>注20</sup>嘉

祥二年（八四九）には太宰府の官吏の多くが不良であること

を憂える上表文を奉っている。その秋に宮内卿になつて

いる。仁壽二年春に病を得て卒している。

卒于慈恩寺西書院。時年六十八。時人知与不知。

莫不流涕愍惜。貞主天性慈仁。語恐傷人。推進

士輩。隨器汲引。長女繩子。心至和順。進退中規。

仁明天皇殊加恩幸。生本康親王。時子内親王。柔

子内親王。少女奥子頗有風儀。闡訓克脩。為天皇

所幸。生惟彥親王。濃子内親王。勝子内親王。時

人以為。外孫皇子。一家繁盛。乃祖慈仁之所及也。

貞主は天性が慈仁であり、進士の輩を推挙し、人物に応じて取り立てた。長女の繩子は心が至って和やかでおとなしく、挙措も中庸を心得ていた。仁明天皇の寵愛も厚かったのであろう。また次女奥子は文徳天皇に入内し、惟彥親王、濃子内親王、勝子内親王を生んでいる。外孫の皇子、皇女によって一家が繁盛するのは親の慈仁のなせる業として

いる。

『本朝皇胤紹運録』は本康親王の御子として次の十二人(内女子二人)を挙げている。

雅望王(従四下。左馬頭) 行忠王(従四上。山城守)

脩平王(従四上。右京大夫) 惟時(大舍人頭)

源兼似(従四下。大弐。弁。阿波守。縫殿守) 源兼

仁(従四上。因幡守) 廉子女王 元子女王(頭)

按。元子。拠「要記并大神宮例文」。寛平元年為「齋宮」。源朝鑒(従五下。豊後守) 源朝憲(従四下。因幡守) 源保望(従四下) 源由道(従四下。阿波備前等守)

『大日本史料』も『紹運録』を引くが、「源兼似」を「源兼次」とする。なお『二代要記』は雅望王と行忠王のみを挙げてゐる。『尊卑分脈』も同様であるが、「朝鑒」は「朝鑑」とする。また由道と保望の順序が入れ替わっている。また同書によれば雅望王は平姓を賜り、「仁明平氏」の祖となっている。二人の女子の中、元子女王は上記のように宇多天皇の寛平元年(八八九)二月十六日に齋宮に卜定され、同九年(八九七)三月十九日に退下している(『日本紀略』)。また廉子女王は藤原時平の妻となり、保忠(「実者一男也」とある)を生んでいる。敦忠については「母同保忠、或在原棟梁女」とあり、廉子女王の腹という可能性もある。保忠は「号八条」とあり、八条の大將と号せられたので、本康親王の八条の宮の邸を親王薨去の延喜元年後に伝領したと考えられる。

### 三、本康親王の閲歴等

次に本康親王の閲歴等を記録類によつてたどつてみたい。

〔空閑地を賜る〕五、六歳

仁明天皇 承和三年（八三六）十一月 三日戊辰。近江

国野洲郡空閑地三十五町賜<sup>注21</sup>本康親

王。〔続日本後記〕

〔荒廢田を賜る〕六、七歳

同 四年（八三七）正月廿二日丙戌。河内国

荒廢田三十町賜<sup>注22</sup>本康親王。

〔続後記〕

〔元服及び同母の柔子内親王裳着〕十七、八歳

同十五年（八四八）四月十四日癸卯。本康親

王源朝臣冷於清涼殿冠焉。並天皇

之遺躰也。本康親王同產柔子内親王

亦初筭焉。〔続後記〕。『日本紀略』

は嘉祥元年四月十四日の条

〔四品を授かる〕十八、九歳

嘉祥二年（八四九）正月 七日壬戌。天皇御

紫宸殿。覽青馬。宴群臣。詔

授无品恒貞親王三品。无品本康親

王四品。〔続後記〕

〔上野大守となる〕十九、二十歳

同 三年（八五〇）正月十五日甲午。四品本

康親王為<sup>注23</sup>上野大守。〔続後記〕

『大日本史料』、『文德実録』は同年

五月十七日の条）

〔仁明天皇崩御〕

同 三月廿一日己亥。帝崩於清涼殿。

時春秋四十一。〔続後記〕

〔彈正尹となる〕二十九、三十歳

清和天皇 貞観二年（八六〇）二月十四日乙未。四品行

上総大守本康親王為<sup>（筆者注：野力）</sup>彈正尹。上総

大守如故。〔三代実録〕

〔兵部卿となる〕三十一、三歳

同 五年（八六三）二月 十日癸卯。四品彈

正尹本康親王為<sup>注24</sup>兵部卿。

〔三代実録〕

〔帶劔を賜る〕

同 十四日丁未。四品兵

部卿上総大守本康親王 勅賜帶劔。

〔三代実録〕、『紀略』

〔上総大守となる〕三十八、九歳

同十一年（八六九）二月十六日甲辰。四品守

兵部卿本康親王為<sup>注25</sup>上総大守。兵部



卿如<sup>レ</sup>故。

〔三代実録〕

〔三品を授かる〕四十、一歳

同十三年（八七一）正月七日甲寅。授<sup>二</sup>四品

行兵部卿兼上総大守本康親王三品。

〔三代実録〕

〔太宰帥となる〕四十五、六歳

陽成天皇 同十八年（八七六）十二月廿六日己巳。<sup>（筆者）</sup>二品

行兵部卿本康親王為<sup>二</sup>太宰帥<sup>一</sup>。兵部

卿如<sup>レ</sup>故云々。

〔三代実録〕

〔二品を授かる〕五十二、三歳

元慶 七年（八八三）正月七日甲戌。授<sup>二</sup>三品

行兵部卿本康親王二品。

〔三代実録〕

〔式部卿となる〕五十三、四歳

光孝天皇 同 八年（八八四）三月九日庚午。二品行兵

部卿本康親王為<sup>二</sup>式部卿<sup>一</sup>。

〔三代実録〕

〔輦車を聴される〕五十八、九歳

宇多天皇 寛平 元年（八八九）左大臣従一位源融六十八

十一（十イ）月十九日。勅聴乗輦車

出入宮中（三十日式部卿本康親王同

〔薨去〕七十、一歳

醍醐天皇 延喜 元年（九〇一）十月十四日。一品式部卿

本康親王薨。<sup>（明皇太子）</sup>〔紀略〕、『醍醐天皇御

記<sup>注23</sup>』同年十二月十六日の条。『扶桑

略記<sup>注24</sup>』昌泰四年十二月十四日の条

その他、史書に散見する本康親王関係の記事を挙げる。

〔東大寺大仏供養における会事監修（大仏の頭が落ちてい

たのを修復したことによる）三十、一歳

清和天皇 貞観 三年（八六一）三月十四日戊子。於<sup>二</sup>東

大寺。設<sup>二</sup>無遮大会<sup>一</sup>。奉<sup>レ</sup>供<sup>二</sup>養毗

盧舍那大仏。勅<sup>二</sup>二品治部卿賀陽

親王。三品中務卿諱<sup>（光孝天皇）</sup>親王。四品

彈正尹本康親王。（以下略）等。相

率向<sup>二</sup>寺。監<sup>二</sup>修会事<sup>一</sup>。〔三代実録〕

〔仁明天皇皇子登（深寂）のために貞朝臣の姓を賜ること

を奏言する〕三十五、六歳

同 八年（八六六）三月二日戊寅。是日。勅。

沙弥深寂賜<sup>二</sup>姓貞朝臣名登<sup>一</sup>。叙<sup>二</sup>正

六位上<sup>一</sup>。（略）先是。貞観五年九

月廿日。三品行中務卿諱<sup>（光孝天皇）</sup>親王。

〔聴〕

〔公卿補任〕<sup>注22</sup>

四品兵部卿兼行上総大守本康親王。

(略) 奏言。

〔三代実録〕

〔侍従の局における公卿の宴に招かれる〕四十三、四歳

同十六年（八七四）八月廿一日丁丑。公卿設

宴会於侍従局。招引三品行兵部卿兼上総大守本康親王。彈正尹四品惟彦親王。終日酣賞。

〔三代実録〕、〔紀略〕

〔陽成天皇退位の還幸に扈從する〕五十三、四歳

陽成天皇 元慶 八年（八八四）二月四日乙未。是日。天

皇出<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>綾綺殿。還<sub>二</sub>幸<sub>一</sub>二条院。

二品行兵部卿本康親王。右大臣從二位兼行左近衛大將源朝臣多。〔略〕扈從文武百官供奉如<sub>レ</sub>常。

〔三代実録〕、〔紀略〕

〔光孝天皇が皇位を受けることを願う〕

光孝天皇

天皇再三辭讓。曾不肯受。二品行兵部卿本康親王起<sub>レ</sub>座跪奏言。歷數

攸<sub>レ</sub>在。謳歌是歸。昔者漢文三讓雖高。猶当<sub>二</sub>大横之繇<sub>一</sub>。遂応<sub>二</sub>代邸之迎<sub>一</sub>。伏願 陛下在此樂推。幸聽<sub>二</sub>於

群臣矣。〔三代実録〕、〔紀略〕

〔光孝天皇から基經、融とともに帶釵を賜る〕

二月五日丙申。天皇將<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>宮。未

御<sub>二</sub>鸞輿<sub>一</sub>之前。太政大臣詣<sub>レ</sub>宮奉<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>起居<sub>一</sub>。解却太上天皇 勅賜之釵。腰底既空。兵部卿本康親王。左大臣源朝臣融。先侍猶尚帶<sub>レ</sub>釵。乍驚相見。各自解<sub>レ</sub>之。天皇即時 勅賜<sub>二</sub>三人帶釵<sub>一</sub>。〔三代実録〕、〔紀略〕

〔郡司擬文の儀に侍す〕

四月廿三日癸丑。天皇御<sub>二</sub>紫宸殿<sub>一</sub>。

式部省奏<sub>二</sub>諸国銓擬郡司擬文<sub>一</sub>。式部卿本康親王。太政大臣。左右大臣及諸公卿侍。〔略〕此儀經久停絶。是日。尋<sub>二</sub>檢旧儀<sub>一</sub>而行<sub>レ</sub>之。

〔三代実録〕、〔紀略〕

〔左相撲司の別当になる〕五十五、六歳

仁和 二年（八八六）六月廿六日甲戌。勅以<sub>二</sub>

三品行中務卿貞保親王<sub>一</sub>為<sub>二</sub>右相撲司別当<sub>一</sub>。去元慶八年。以<sub>二</sub>二品行式部卿本康親王<sub>一</sub>為<sub>二</sub>左相撲司別当<sub>一</sub>。

今不改。〔三代実録〕、『紀略』

〔光孝天皇皇子清実のために滋水朝臣の姓を賜ることを上表する〕

十月十三日戊午。勅。無姓者其名

清実。賜姓滋水朝臣。〔略〕先是。

二品行式部卿本康親王。右大臣從二位兼行左近衛大將源朝臣多。〔略〕

等<sup>注25</sup>諸<sup>注26</sup>闕上表曰。〔三代実録〕

その他、『宇多天皇御記』寛平元年（八八九）三月廿四日の踏歌の後宴に招かれる、四月十九日の殿上の騎射において念人になる、同二年（八九〇）五月六日の近衛の騎射において、人が墮ちた馬は走っても負けであるとする意見を奏する、七月廿九日の相撲の召合に出る等の記事がある。

また『扶桑略記』によれば、同八年（八九六）閏正月六日、雲林院の子日の宴に皇太子（醍醐）等とともに扈從している。

なお『西宮記』によれば、『九記』を引いて、延喜十年正月一日が日食によって廢務となったため職曹司において盃酌、春宮の御服を給うたのは元慶の例に依るとして『故八条式部卿<sup>本</sup>私記』を引き、この記に依り、これに准じて行われたと言う。また同じく『式部卿本康記』を引いて、中務<sup>本</sup>の室家蛭淵氏が大政大臣基経の口添えて叙位に預か

ることになり、その慶賀を申すために太閤を訪ねたところ不在であったが、興基中將に逢い、太閤が昔の忠仁公は妻が叙位に預かり嵯峨院に慶びの由を奏したところ前例がないということであり、仁和の先帝も故実に倣えとのことであつたが、今は奏することになっていると言う。これによれば、『式部卿本康記』なるものがあり、本康親王在世時の故実が記されていたのである。なおこの室蛭淵氏は分らない。

陽成天皇の元慶二年（八七八）、親王四十七、八歳の時には日本紀竟宴歌に歌を一首詠んでいる。

元慶二年日本紀竟宴、彦波瀲武鸕鷀 鷦草葺不合尊 兵部卿本康親王

わたつうみのなみかきわけてあらはれしたけうのみこと  
いくよへぬらん（『続後撰集』<sup>注27</sup>卷九神祇 五七八、『万代

和歌集』<sup>注28</sup>卷七神祇 一五四一）

『菅家後集』（四七四番）によれば、菅原道真是式部卿本康親王の七絃の琴に感じて次の詩を作っている。

感吏部王彈琴、應制。一絶。

榮啓後身吏部王 七条絲上百愁忘 酒酣莫奏蕭々曲

峽水松風忽断腸（四七五）<sup>注29</sup>

親王を孔子が太山で会った榮啓期に擬し、その琴の音が無

数の憂愁を忘れさせ、谷川の水音や松風の音に似た響きが断腸の思いにさせるという。

日本古典文学大系の補注に指摘するように、『三代実録』貞観六年（八六四）二月二日の高橋文室麻呂の卒伝には次のようにある。

二月戊午朔。二日己未。從五位下行越後介高橋朝臣文室麻呂卒。（略）文室麻呂。年九歲事嵯峨太上天皇。天皇自教鼓琴。其伎日長。他教習者無有相及。仍賜文室麻呂号曰琴師。十六歲。始加元服。便為藏人。太上天皇崩後。仁明天皇徵為藏人。尋拜常陸大掾。遷右兵衛大尉。有勅奉教鼓琴於諱<sub>光孝天皇</sub>親王。本康親王。（略）文室麻呂能琴之名冠於當時。嘗文德天皇及清和太上天皇徵令侍殿上。為師学彈琴。歷仕四代。頗蒙寵幸。

文室麻呂は嵯峨太上天皇に琴を鼓することを教わり、琴の師となる。太上天皇崩後、仁明天皇に仕え、琴を鼓することを光孝天皇と本康親王に教えている。父仁明天皇については、その崩御の時の追悼の文に次のようにある。

帝叡哲聰明。苞綜衆芸。最耽經史。（略）兼愛文藻。善書法。（略）亦工弓射。至鼓琴吹管。古之虞舜漢成不之過也（『統後記』、『紀略』嘉祥三年

三月廿五日）

琴についても仁明天皇の影響によるところが大きいのであろう。

また同じく『菅家後集』（四九六番）によれば、道真は配所にあつて本康親王の訃報を聞き、その死を悼んで次の詩を作っている。

奉哭吏部王。故一品親王。

配処蒼天最極西 恩情未見阻雲泥 去年真跡多霑潤 今

日飛聞甚操棲 元老忘無朝位立 林亭只有夜禽棲 世間

自此琴声斷 不独人啼鬼亦啼 （五二二）

道真は、配所にある自分に恩情を寄せた親王に謝し、また朝廷の元老として、風流人士として、さらに琴の弾き手としての親王の死を悼んでいる。

#### 四、本康親王の方

『薰集類抄』<sup>注30</sup>上は諸方と伝方の人を時代順に挙げている。

先ず梅花の方を伝えた一人として、本康親王を挙げている。

八条宮。本康。一品式部卿。仁明天皇第五親王。母

從四位上滋野繩子。貞主女也。

また親王の母滋野繩子の父貞主についても、八条宮より前に次のように挙げている。

滋宰相。滋野貞主。参議宮内卿正四位下。尾張守家譯子。

本康親王は母滋野繩子を通じて、その父貞主から梅花の方を伝えた可能性がある。また八条大将についても次のようにある。

八条大将。藤原保忠。大納言正三位右近衛大将兼陸奥

出羽按察使。左大臣時平一男。母本康親王

女從四位上廉子女王。

八条大将保忠の母が本康親王女廉子女王であることからすると、親王は梅花の方を廉子に伝え、それが保忠に伝えられた可能性がある。以上からすると、滋野貞主―繩子―本康親王―廉子―保忠のように梅花の方が伝えられたと考えられるのである。つまり父から娘へ、そしてその男子へという血筋に伝えられていると見ることができる。なお右大將源公忠について「母典侍滋野直子」とするが、何かの關係があるかも知れない。

侍從についても、梅花の滋宰相、八条宮、八条大将を挙げている。八条宮のところでは二つの方を挙げてその後に次のようにある。

一説。入麝香。一説。黃鬱金。或加占唐小一分。

合三六種。而此本無之。和蜜合搗三千許杵。此二方者不伝男。是承和仰事也。延喜六年二月三日。典侍

滋野直子朝臣所献也。

二方というのがこの前に挙げた侍從のことか、一説として挙げたものなのか明確でないが、この侍從の二つの方は仁明天皇の仰せによって男子には伝えられず、典侍滋野直子から醍醐天皇に献ぜられたとされている。また八条大将については、

大将者。八条式部卿親王之孫也。然即伝来方可同承和方。而有相誤。甚可疑之。

保忠は本康親王の孫であるから仁明天皇の方を伝えているはずとしながらも、これを疑っている。

黒方についても、滋宰相、八条宮、八条大将を挙げている。八条宮のところでは先ず一つの方を挙げて、「或云。至要方也。延喜六年二月三日。典侍滋野直子朝臣所献也」とする。八条大将のところでも「可疑之由。委見侍從」とする。

その他、薰衣香のところでは八条宮を挙げている。増損薰衣香のところでは、「八条宮所上」としている。また百和香では「寛平六年九月十日。八条一品宮於御前写給百和香方也。亦称黒方。是誤歟。亦名侍從」とある。なお坎方には「承和秘方」とあり、承和百歩香の名も挙げている。さらに曾昌薰衣香のところでは「隨時朝臣所献」

とあるが、参議正四位下平隨時は本康親王の一男雅望王の二男（『紹運録』等）である。

『薰集類抄』下は伝方の人別に調合の方法を挙げている。「煎甘葛」のところでは、八条宮、八条大将、隨時朝臣を挙げている。「炮甲香」では、八条宮、隨時朝臣を挙げている。「和合次第」では、滋宰相、八条大将を挙げることが、後者には「承和秘方同之」とする。「合春」では隨時朝臣を挙げている。「埋日数。付埋所」では、承和百歩香方、同御時（仁明天皇の時代）、八条式部卿宮を挙げる。宮については「一宿埋馬矢下」。件方伝「得陽成院書云々」とする。

終りのところでは、その道を得たる者として典侍直子の説を伝えた公忠朝臣と、八条式部卿宮の孫であることを以て名を得た隨時朝臣を挙げ、「此兩人其流雖同。其派猶異。口説相違。手方相乖」として各々の方法を述べている。

### おわりに

八条式部卿本康親王は仁明天皇の皇子たちの中で、文徳天皇と光孝天皇をおいて、兵部卿、式部卿の宮として枢要な位置にあった。『本康親王記』なるものも伝わっていたようであり、宮中の行事、故実にも詳しくあったと推察され

る。また歌も残し、七絃の琴も堪能であった。この琴については仁明天皇の薫育によるところが大きいと考えられる。天皇は「苞『綜衆芸』」と言われているので、琴に限らず影響を受けたと考えられるが、殊に薫物については父天皇の意思を存分に体现し、大成させたのであろう。

古注が指摘するように、薫物の名人本康親王を紫の上の父式部卿の宮に擬し、紫の上がその方を伝えることで、薫物合わせにおいてその本領を発揮し、源氏の妻にあざわしい位置に立つ拠り所にしたと考えられる。

注1 『大日本史料』延喜元年十二月十四日の記事。

小野寺篤子氏「朝顔斎院再考―准拠設定の必然性―」（『日本女子大学 国文目録』第十七号 昭和五十三年二月）にも言及がある。

注2 『源氏物語』本文の引用は日本古典文学全集により、その冊数・頁数を示す。以下同じ。

注3 『花鳥余情』は源氏物語古註釈叢刊第二巻により、頁数を示す。

注4 玉上琢彌著『源氏物語評釈』の巻数と頁数を示す。

注5 玉上琢彌編『紫明抄 河海抄』の頁数を示す。以下同じ。

注6 瀬戸宏太氏「源氏物語の薫香―末摘花と紫上をめぐって―」（『国語と国文学』平成四年九月）に説がある。

注7 注5の書の頁数を示す。

注8 池田亀鑑編『源氏物語事典上巻』の頁数を示す。

注9 国史大系本による。

注10 『古今和歌集』の引用は日本古典文学全集により、頁数を示す。

注11 講談社学術文庫『古今和歌集』（二）に詳しい（一八七頁）。

注12 注11の書の頁数を示す。

注13 旺文社文庫『古今和歌集』補注による（三〇九頁）。

注14 群書類従本による。

注15 史籍集覧本による。

注16 史籍集覧本による。

注17 国史大系本による。

注18 国史大系本による。

注19 国史大系本による。

注20 『日本紀略』承和十一年四月三十日に記事がある。

注21 国史大系本による。

注22 国史大系本による。

注23 所功編『三代御記逸文集成』による。

注24 国史大系本による。

注25 注23の書に同じ。

注26 神道大系本による。

注27 国歌大観本による。

注28 注27に同じ。

注29 『菅家後集』は日本古典文学大系本により、頁数を示す。

以下同じ。

注30 群書類従本による。